

Parinirvāṇa 考

ギルギット本『法華経』「如来寿量品」を中心に

李 暎 実

はじめに

『法華経』「如来寿量品」に、「完全な涅槃にはいかない¹」と訳される箇所が三例存在する。この「完全な涅槃」に対するサンスクリット語は、nir-√vā「涅槃する」の動詞から作られる名詞nirvāṇa「涅槃/涅槃すること」、pari-nir-√vā「般涅槃する」の動詞からparinirvāṇa「般涅槃/般涅槃すること」との名詞、二つがあり、韻文は、nir-√vāを使用し、散文は、pari-nir-√vāを使用する。そして散文に表れるparinirvāṇa「般涅槃」も、韻文に表れるnirvāṇa「涅槃」も、「さとりを得た人が死ぬこと²」を意味する。つまり、その散文後半の譬喩の内容からして、「死」の意味があてられている。そして、このpari-nir-√vāに、否定辞/a/を付し、「般涅槃することがない」つまり「死ぬことがない」如来であると強調するテキストが、KN 319. 4 aparinirvāyamāṇaであり、『妙法華』ヤチベット訳に同じである。しかし、このaparinirvāyamāṇaに対応する、諸写本の読みは、否定辞の有無による違いが顕著である。本稿においては、ネパール写本や中央アジア写本の読みと、ギルギット本の読みの違いを提示し、従来テキストKN

¹ 松濤 [2002: 109-111] では、「完全な涅槃にはいかない」と訳出された三つの梵語がある。KN 319. 1 a-parinirvṛta, KN 319. 4 a-parinirvāyamāṇa, KN 320. 4 a-parinirvāyan. この「はいらない」との訳は、「入滅」の訳語による意識である。仏教辞典(岩波、第二版: 797)によれば、「<入滅>とは、①欲望の炎がかき消された状態、宗教的解放、そのような境地に入ることで、ただし、完全な解脱は肉体の完全な消滅、つまり死によって完結する、という考えから、<入滅>とは、②宗教的に目覚めた人が死ぬことをも意味するようになった」と説明する。つまり<入滅>との訳語に、「解脱」と「死」との二種類の意味が存在する。

² 「完全な涅槃」parinirvāṇa(般涅槃)は、語義的に、「(火の)吹き消された」ことであり、すなわち迷いの煩惱を滅してさとりを実現した状態をいう。同時に「死」を意味し、この世に出現された仏陀の肉体の死を指す。松濤 [2001: 273 n. 64]。ただし、この註64は、第一章「序品」に対応するサンスクリット語parinirvṛtaの説明である。「如来寿量品」の註に「般涅槃」に対する説明は与えていない。

aparinirvāyamāṇa eva parinirvāṇam ārocayāmiと『妙法華』の読みに対応する、ギルギット本D1 parinirvāṇa evam aparinirvāṇam ārocayāmiと『正法華』の読みを考察する。

1. 「如来寿量品」における釈迦仏の般涅槃

『法華経』「如来寿量品」の主たるテーマは、「釈迦仏の寿量³」に関して、「釈迦仏の般涅槃⁴」に関して、これら二つと言えらるだろう。主たるテーマのうち「釈迦仏の般涅槃」に関する経文（以下 [1]）には、般涅槃の語を二度繰り返す。従来、翻訳される底本KNは、**aparinirvāyamāṇa eva parinirvāṇam ārocayāmi**「（私はいま）完全な涅槃にはいないのに、『完全な涅槃（にはいる）』と告げる」（松濤2002: 110）と訳され、*pari-nir-√vā*の現在分詞に否定辞 /a/ を付し「死することはない」、若しくは「死するのではない」との語が強調される。この現在分詞 **aparinirvāyamāṇa** 「般涅槃しようとすることはない」に対応する『妙法華』「非實滅度」は、『法華論』や吉蔵の『法華義疏』をはじめとして、「如来寿量品」の釈迦仏は、「報（身）仏」であり、「報仏」とは有始無終、つまり終わりの無い寿量を持つ仏である、との解釈がなされる。久遠にさとったものであるとの、「如来寿量品」の釈迦仏の始まり（有始）を伝えつつ、常に衆生たちに法を説きながら未来においても死はない（無終）とする理解は、広く知れ渡っている。そして、このような従来の見解に、疑問を抱いた松本氏は、「従来の仏寿の二倍を過ぎた時点での、“最終的入滅”⁵」は説かれていると述べる。では、本稿における筆者の結論からいうならば、「無終」ではなく「有終」である「最終的入滅」は、『正法華』「壽命限也」「於泥洹而般泥洹」と、ギルギット本“bhaviṣyayuspramāṇasya paripūrṇatā” “parinirvāṇa evam aparinirvāṇam” との名辞によって表現されているのである。

³ 釈迦仏の寿量に関しては、既に多くの視点から考察されている。松本 [2007: 64-73]、松本 [2010: 519-544]、松本 [2012: 252-254]、松本 [2017: 47-55]、松本 [2018: 41-47]、松本 [2019: 29-52]。

⁴ 本稿においては、サンスクリットの名詞や動詞の違いを考慮し、*parinirvāṇa* 「般涅槃」*parinirvṛta* 「般涅槃した」*nirvāṇa* 「涅槃」*nirvṛta* 「涅槃した」との音訳を用いる。

⁵ 松本 [2010: 543]。このような見解は、先に、荻谷 [1983: 171] に述べられている。「寿命の量がいかに長いものであろうとも、その仏の義務が達成された暁には、その寿命の量は満了するのであり、その時仏は、まさしく灯明の因（油）が尽きて消えるが如く、完全な滅度即ち灰身滅智をとるのである。」

1. 1. 般涅槃に關係する散文テキスト

[1] D1⁶ 116b7 - 117a2 (ギルギット本)

◁1> tāvac cirābhisambuddho (◊) parimitāyuspramāṇas tathāgataḥ sadā sthita:⁷ ◁2> aparinirvṛtas tathāgataḥ parinirvāṇam ādarśayati • **vainayikavaśāt** ◁3> na ca tāvan me kulaputrāḥ adyāpi **paurovikīṃ**⁸ bodhisatva-carī⁹ pariniṣpādītā āyuspramāṇam **apyam** paripūrṇam • ◁4> api tu khalu punaḥ kulaputrā adyāpi ¹⁰**ttadviguṇena** me

⁶ LSMS 12. テキスト内の太字は、KNの語との違いである。

⁷ -sthitoと読むP1写本一つがある。次の語を avagraha (◊) でなく a-parinirvṛtasと読むことは、全写本に同じである (N2写本のみ、aparinirvṛtasの語を欠く!)。sthita: は、写本の特徴としてD1 sthita|と読むが、両漢訳とチベット訳は、ここに danḍaを入れない。

⁸ [SP (W) : 113] に paurovikīと転写するが、写本 (D1 117a1) は paurovikīṃであり anusvāraは存在する。この anusvāraは、D1独自の読みであり、paurovikīṃと読む語は他に探せない。同じコレクションにあるギルギット写本 *Lager Prajñāpāramitā* に、atha te manuṣyās te ca devās tenaiva pṛitiprasādaprāmodyena **paurovikīṃ jātim** samanusrāmaṃti sma. 『光 讚 經』147c19: 於時諸天適生彼間人中天上、即識宿命歡喜悅豫。の用例があり、この **paurovikīṃ jātim** 「前のものに属している生まれ」は、マヌ法典 (MS IV, 148) にも表れる。ただ現テキスト carīは、被修飾語とならないため、誤写であると判断されるが、同じく [1] D1◁3> *apyam* の anusvāraが、この [1] の文に大きな役割を果たすため、誤写と処理せず副詞と処理する。

⁹ BHSD 226 caryā (Skt.) = cari, BHSD 225 cari or carī (not recorded in MIndic.) cf. BHSG § 3. 115. ギルギット本の用例も含め、『法華經』に carīは、散文 (現テキスト) と韻文の両方に使用される。cf. SP Index cari (-ī); SP III (KN 63, 13, v. 19) = ギルギット本 D2 [SP (W) : 205], SP VIII (KN 203, 4, v. 1) = ギルギット本に欠く。一方KNでは、(carī/carīmを韻文に)、caryā/caryāmを散文に使用し、「行又は菩薩行の後、仏陀となる」との以下の用例に使用する。SP I (KN 27, 2 v. 88) **caryām** caritvā tada ānulomikīṃ 相応しい (ānulomikīṃ) 行 (caryā) を、その時 (tada) 次々となしたのちに (caritvā)。「昔の菩薩行」の用例は、SP VIII (KN 211, 8) evam eva bhagavann asmākam api tathāgatena **pūrvam eva bodhisattvacaryām** caratā sarvajñatā-cittāny utpādītāny abhūvan tāni ca vyaṃ bhagavan na jānīmo na budhyāmahe / te vyaṃ bhagavann arhad-bhūmau nirvṛtāḥ sma iti samjānīmaḥ / まさに同じように (evam eva)、世尊よ、他ならぬ昔に (**pūrvam eva**)、菩薩行 (**bodhisattva-caryā**) を行じる (caratā) 如来によって、わたし達 [五百人の阿羅漢] (asmākam) にも (api)、一切知者性という心たちが (sarvajñatā-cittāni)、生ぜしめられた (utpādita) のであった (abhūvan) けれども (ca)、世尊よ (bhagavan)、わたし達は (vyaṃ)、それら [心] を (tāni)、知る (jānīmaḥ) のではなく (na)、気づく (budhyāmahe) のでもなく、そのような (te) わたし達は (vyaṃ)、世尊よ、「阿羅漢の地 (arhad-bhūmi) に於いて、涅槃した (nirvṛta) ものであった (sma)」と (iti)、想う (samjānīmaḥ) のである。

¹⁰ SP IVに、語頭 t / tt の用例がある。[SP (K) : 15] tasya (K) に対応する ttad (D1) があり、tasya が ttad と対応する理由は分からないが、tasya dviguṇena > ttad-dviguṇena (-dd- / -d-) > ttadviguṇena と考えられる。

kalpakotīnayaṭasahasraṇī ¹¹ **bhaviṣyayuṣṭramāṇasya paripūrṇatā** • ⁵ idānīm
 khalu punar ahaṃ kulaputrāḥ ¹² **parinirvāṇa evam** ¹³ aparinirvāṇam ārocayāmi •

◀1> それ程に (tāvat) 久しい [以前に] (cira) 覚ったもの (abhisambuddha) であり、量り知れない寿命の量 (aparimita-āyus-pramāṇa) を有する如来は、常に (sadā) 住してきた (sthita)。◀2> 般涅槃したことはない (aparinirvrta) 如来は、般涅槃 (parinirvāṇa) を示現する (ādarśayati) ののである。教化さるべき者 (vainayika) のために (-vaśāt)、◀3> しかし (ca)、良家の子らよ、今もなお (adya^api)、私の (me) 過去世に (paurvikīm)、菩薩の行 (bodhisatva-carī) が完成せられた (pariniṣpādītā) [時間の] 程に (tāvat)、寿命の量 (āyuspramāṇam) もまた (apyam) 満了した (paripūrṇam)、というのではない (na)。◀4> さらにまた (api tu)、実に (khalu punaḥ)、良家の子らよ、今 (adya) 仮に (api)、その二倍による (ttadviguṇena)、幾百千カルパ・コーティ・ナユタ [の時間] が経過した後 (adv.) [であれば]、私の (me) 寿命の量は (āyuspramāṇasya)、満了したこと (paripūrṇatā) になるでしょう (bhaviṣye)。◀5> さらにいうならばまた (khalu punar)、その際 (idānīm)¹⁴、私は (aham)、良家の子らよ、般涅槃において (parinirvāṇe)、このように (evam)、[これは、]「非般涅槃 [である]」(aparinirvāṇa) と説くのである。

¹¹ この bhaviṣya と yuṣṭramāṇasya は、行をまたいでいる。D1 -yayuṣ- < -yāyus- としして語中音 (Inlaut) の誤写と考える。形容詞 (PW: bhaviṣya adj. zukünftig) と名詞からなる複合語として、「来たるべき寿命の量 (bhaviṣya-āyuspramāṇa) が満了することがある」と読むことも可能であろう。さらに、サンディにより、bhaviṣye^āyus; bhaviṣye (fut. 3sg.) と読むことも可能である。cf. RgsGr § 36. 12 not recorded by Edgerton; but apparently 1 sg. fut. -iṣye used for 3sg.

¹² parinirvāṇa D1に、(正) 於泥洹、(Tib. F) yongs su mya ngan las 'das mod kyiが対応する。ネパール写本の異読としては、parinirvāṇam N2; parinirvāte T7,B,A1; parinirvāyamāna StP,P2; parinirvāyamānā evaṃ parinirvāyamāna R; aparinirvāyamāna Bj,K,C4,C5,T6,T7, L1,etc. (=KN, WT) ; aparinirvāpayamāna N1; aparinirvāyamāna evaṃ pariṇirvāyamānā P3である。

¹³ parinirvānevaparinirvāṇam ārocayāmi T7の読みがあり、parinirvāne-v-aparinirvāṇamと読むことも可能であるが、D1以外すべての写本にこの箇所は parinirvāṇam であるため、parinirvāne-va-parinirvāṇam であろう。

¹⁴ idānīm に対する両漢訳は異なる。[1] (正) ◀5> 然後、[1] (妙) ◀5> 然今。

[1] KN 318. 15 - 319. 5¹⁵ (Kern&Nanjio 校訂本)

〈1〉 tāvaccirābhisambuddho¹⁶ 'parimitāyuspramāṇam tathāgataḥ sadā sthitaḥ| 〈2〉
 aparinirvṛtas tathāgataḥ parinirvāṇam ādarśayati **vaineya-vaśena**| 〈3〉 na ca tāvan me
 kulaputrā adyāpi **paurvikī** bodhisattvacaryāpariniṣpāditāyuspramāṇam **apy**
aparipūrṇam|¹⁷ 〈4〉 api tu khalu punaḥ kulaputrā adyāpi **tad-dviguṇena** me
 kalpakoṭīnayutaśatasahasrāṇi bhaviṣyanty āyuspramāṇasyā**paripūrṇatvāt**| 〈5〉 idānīm
 khalu punar ahaṃ kulaputrā **aparinirvāyamāṇa eva** parinirvāṇam ārocayāmi|

〈1〉それ程に久しい [以前に] 覚った (tāvac-cira-abhisambuddha)、如来 (tathāgata)
 は、量り知れない寿命量を有し (aparimita-āyus-pramāṇam: adv.)、常に (sadā)

¹⁵ Kern [1884: 137] The Tathāgata who so long ago was perfectly enlightened is unlimited in the duration of his life, he is everlasting. Without being extinct, the Tathāgata makes a show of extinction, on behalf of those who have to be educated. And even now, young gentlemen of good family, I have not accomplished my ancient Bodhisattvacourse, and the measure of my lifetime is not full. Nay, young men of good family, **I shall yet have twice as many hundred thousand myriads of kotis of Æons before the measure of my lifetime be full.** I announce final extinction, young men of good family, though myself I do not become finally extinct.

¹⁶ ギルギット写本に avagraha 符号は無い。tathāgato の後 avagraha を用いるネパール写本は C4,T7,N1 である。写本に書かれたままの転写版は少なく、殆どは古典サンスクリット文法を基本に校訂本が作られてきた。そのため、写本に直接あたらない限り、abhinihita sandhi における avagraha の有無や sandhi 等は、校訂者の任意となる。ギルギット写本は、-o a- hiatus の場合もあるが、殆どの場合 avagraha なく a- は語末の母音に融合する (daharo haṃ, tiṣṭhato bhīkṣṇa)。

¹⁷ この文章は長らく論議されてきた箇所である。松本 [2010: 541] では、na ca tāvan me kulaputrā adyāpi paurvikī bodhisattvacaryāpariniṣpāditāyuspramāṇam apy aparipūrṇam | 「これまで、私の、過去世の菩薩行 (bodhisattva-caryā) によって完成された寿命の量 (āyus-pramāṇa) は、今でも (adyāpi)、まだ満了されていない (aparipūrṇa)」と訳される。この訳は、『妙法華』の如く bodhisattvacaryāpariniṣpāditāyuspramāṇam をすべて複合語として読む。このような訳出は、松濤訳の初版 (昭51年、1976年) 「いまなお、私の過去の菩薩としての修行によって成就された寿命の長さは、いまだに満ちてはいない」に同じである。この初版、松本 [2010]、荻谷 [2013] 以外、松濤 [2002] や他の現代語訳は Kern [1884: 137] 英訳の理解と同じ訳 (菩薩行は完成されていない) に改められている。cf. 久保 [1991: 900]。しかし、この完成された (pariniṣpāditā) の語は、(正) 成就、(妙) 成、(Tib.) yongs su rdzogs pa のように、肯定的に訳すべきであろう。cf. 李 [2019]。『法華経』に、比丘や比丘尼たちは、「菩薩行を満たしてから (bodhisattvacaryāṃ paripūrya)、正覚者となるであろう」(KN 65. 5, 201. 11, 269. 1, 269. 10) と、釈迦仏によって授記されるのであるが、その記を受ける釈迦仏の菩薩行が完成していないとなれば、自家撞着というものではないだろうか。

住してきた (sthita)。❷ 般涅槃したことはない (aparinirvṛta) 如来は、教化されるべき者 (vaineya) のために (-vaśena)、般涅槃 (parinirvāṇa) を示現する (ādarsāyati) のである。❸ しかし (ca)、良家の子らよ、今もなお (adya^api)、私の (me)、昔の (paurvikī) 菩薩行 (bodhisatva-caryā) は完成せられた (pariniṣpādītā) という程はなく (na tāvat)、[わたしの] 寿命の量 [の方] もまた (api)、満了していない (aparipūrṇam) のである。❹ しかしながら (apitu)、実にまた (khalu punaḥ) 良家の子らよ、今なお (adya^api)、寿命の量は (āyuspramāṇam)、[未だ] 満ちていないことから¹⁸ (aparipūrṇatvāt)、わたしには (me)、その (tad) 二倍 (dvi-guṇena) による、幾百千カルパ・コーティ・ナユタ [の時間] があるだろう (bhaviṣyanti)。❺ しかし (khalu punar)、いま (idānīm)、私は (aham)、良家の子らよ、まさに般涅槃しようとすることなく (aparinirvāyamāṇa eva)、般涅槃 (parinirvāṇa) を説くのである。

[1] (正) 『正法華経』 116b7-117a2

❶ 現這得佛成平等覺已來大久、壽命無量、常住 ❷ 不滅度¹⁹。❸ 又如來、不必如²⁰初所説。前過去世時行菩薩法以爲成就壽命限也²¹。❹ 又如來得佛已來、復倍前喻億百千姪。❺ 然後乃、於泥洹而般泥洹。

[1] (妙) 『妙法華経』 42c19-42c24

❶ 如是、我成佛已來甚大久遠、壽命無量阿僧祇劫、常住 ❷ 不滅¹⁹。❸ 諸善男子、我本行菩薩道所成壽命²²、今猶未盡²³、❹ 復倍上數。❺ 然今、非實滅度而便唱言當取滅度。

¹⁸ 松濤 [2002: 110] 「私の寿命の長さが満ちるまでには、私にはいまからでも」 āparipūrṇatvāt と解釈し、adyāpi を「いまからでも」と処理する。

¹⁹ 両漢訳「常住・不滅(度)」は、厳密に言えば梵文に対応しない。「常に (sadā) 住してきた (sthita)」の文言は、偈十四に、私のこの仏国土は常に住する (me kṣetram idaṃ sadā sthitam) として、散文とは異なる仏国土に対する常住を説く。

²⁰ 初始 = 如初 <三> <宮>

²¹ [1] (正) ❸ 限也 = [1] D1.3. paripūrṇam, D1.4. paripūrṇatā.

²² 松本 [2012: 254] では、「私は、『妙法華』の「我本行菩薩道所成寿命、今猶未盡」という訳文は、本来のテキストを、基本的には正確に伝えているのではないかと思っている。」と述べる。

²³ [1] (妙) ❸ 未盡 = [1] KN.3. aparipūrṇam, KN.4. aparipūrṇatvāt.

[1] (Tib) T. ma 152b6 - 153a1 (東洋文庫 Tokyo 写本)

◀1> yun ring po de srid nas mngon par rdzogs par sangs rgyas te de bzhin gshegs pa'i tshe'i tshad ni dpag tu med do || ▶2> de bzhin gshegs pa ni yongs su mya ngan las mi 'da' ste rtag tu bzhugs mod kyi | 'dul ba'i dbang gis yong su mya ngan las 'das pa yang stan to || ▶3> rigs kyi bu dag ngas da dung yang sngon gyi byang chub sems dpa'i spyod pa yongs su rdzogs par byas pa'i tshe'i tshad du yang ma phyin te | ▶4> rigs kyi bu dag ngas da dung yang bskal pa bye ba khrag khrig brgya stong de nyis gyur gyis **nga'i tshe'i tshad tshang bar 'gyur ro** || ▶5> rigs kyi bu dag ngas 'di ltar yongs su mya ngan las mi²⁴ 'da' mod kyi yongs su mya ngan las 'da' bar smras so ||

◀1> それほどの長い時間以来、現等覚しているであり、如来の寿命の量は、量られることができない。▶2> 如来は、般涅槃しない、即ち常に住しているけれども、調伏する力によって、般涅槃したことをも示すのである。▶3> 良家の子らよ、今なおも、私によって以前の菩薩行を完全に完成されたことに対する、寿命の量にも、至らないのである。▶4> 良家の子らよ、私によって今さらに、幾百千カルパコーティナユタその二倍によって、**私の寿命の量は満たされるでしょう**。▶5> 良家の子らよ、私はこのように般涅槃しないけれども、般涅槃すると告げる。

1.2. 「般涅槃」を説く散文の釈迦仏

上記 [1] から、般涅槃に関係する部分だけを取り出して以下に引く。

【散文】

[1] D1<5> (117a2) ahaṃ --- **parinirvāṇa** evam aparinirvāṇam ārocayāmi |

[1] KN<5> (319.4) aham --- **aparinirvāyamāṇa** eva parinirvāṇam ārocayāmi |²⁵

以下 [2] は、[1] の後に再度語られる般涅槃に関係する文である。

[2] D1 (117b1) tathāgataḥ **parinirvāyād**²⁶ evaṃ parinirvāṇam ārocayati sma |

²⁴ Tib. F 写本においては、mi は行間の外に書かれている。

²⁵ 松濤 [2002: 109] 「完全な涅槃にはいったことはないが、如来は…完全な涅槃をあらわしてみせるのである。」

²⁶ SP (W) [1975: 113] parinirvāyān と転写されるが、写本は parinirvāyād (117b1) と読む。D1 の読みに類似し、否定辞のないネパール写本は、parinirvāyant C5, parinirvāyaṃ C6がある。

[2] KN (320. 4) **tathāgato 'parinirvāyann** eva parinirvāṇam ārocayati ²⁷

KNは、[1] と [2] に同じく、否定辞の現在分詞 a-pari-nir-√vā と、否定辞のない名詞 parinirvāṇam の語を繰り返す。IOL San²⁸等の中央アジア写本断簡²⁹から対応する読みがあり、[2] のテキストに関して SIP³⁰、O 写本のみ、tathāgato の後に viditvā を置き、aparinirvāyamāṇas である tathāgatas として「般涅槃しようとするのではない如来」であることを明確にする。一方、[2] D1, IOL San, Nep. の語順は、tathāgato と否定辞 /a/ による abhinihitasandhi として、母音接続における発音としての /a/ の欠如を示す。これらの写本断簡と諸写本を含め、特に「般涅槃」の語に関して読みが異なるのは、ギルギット写本である。[1] [2] の前分に異なりがあるとはいえ、その後分には、[1] [2] KN parinirvāṇam ārocayāmi 「般涅槃」を説く釈迦仏との読みに、諸写本が一致する。その中で唯一否定辞を付す後分、[1] D1:5> **aparinirvāṇam ārocayāmi** 「非般涅槃」と説く釈迦仏とは、どのような解釈が成り立つであろうか。以下、[1] [2] の和訳と漢訳を示す。

²⁷ 松壽 [2002: 111] 「如来は完全な涅槃にはいないままに、…『完全な涅槃 (にはいる)』と告げるのである。」

²⁸ India Office Library に保存される Sanskrit 写本。cf. *The British Library Sanskrit Fragments* (BLSF) Tokyo 2006.

²⁹ [2] KN320. 4 に対応する中央アジア写本断簡 (IOL San) を、以下に示す。

IOL San 0516B; SC. Kha. 0011r (=HD57) : SP (C) p. 268

7 [gat] adarśanāya teṣāṃ tathāgata āraṃ (ba) ṇāṃ manasikārāṃ kuśalamūla bhaviṣyanti idi **viditva tathāgato ('parinirvāyamāṇo e+**

8 [p] arinirvāṇa āroceti

他の中央アジア写本 (SIP, O) は、viditvā と tathāgato の順序を入れ替えることによって、否定辞 /a/ を強調する。

SIP SI P/79. 2., Рис. 158., Саддхармапундарика-сутра, фр. 2a (BB34, LXXIII, 2)

2. tā [n] i tathāgatāraṃbaṇamanasikārakuśalamūlāni bhaviṣyamtīti · etad arthaṃ **tathāgato viditvā aparinirvāyamāṇas caiva ta +**

O (Khādaliq MS, = "Kashgar"MS.) 309a3~

3 gata darśanāya teṣāṃ tāni tathāgatā + + + + + k [ā] rakuśaramūlāni bhavi

4 syamtīti · etada ○ rthaṃ **tathāgato viditvā aparinirvāyamāṇas caiva tathāgata:**

5 parinirvāṇam ity ārocayati

³⁰ Ser India Petrovskij (St. Petersburg) ロシア総領事ペトロスキーによって収集された中央アジア写本断簡。

【和訳】

[1] D1<5> 私は、般涅槃において、このように「非般涅槃」と説く。

[1] KN<5> 私は、まさに般涅槃しようとすることなく、「般涅槃」を説く。

[2] D1 如来は、「般涅槃するであろう」このように「般涅槃」を説いたのである。

[2] KN 般涅槃しないものに他ならない如来は、「般涅槃」を説く。

【漢訳】

[1] (正) <5> 然後乃、於泥洹而般泥洹曰。

[1] (妙) <5> 然今、非實滅度、而便唱言當取滅度³¹。

[2] (正) 其不滅度者、教令滅度。

[2] (妙) 是故、如來雖不實滅、而言滅度。

[1] D1<5> 前分 *parinirvāṇa evaṃ* に対して、ギルギットの *sandhi* の規則が古典サンスクリット *sandhi*³² に同じとみるならば、*parinirvāṇe evaṃ* 処格であり、[1] (正) <5> 「於泥洹」に対応する。[1] (正) <5> 「然後」は、[1] D1<4> 「その二倍による、幾百千カルバ・コーティ・ナユタ [の時間] が経過した後 [であれば]、私の寿命の量は満たされたことになるでしょう」との未来の寿量の満了に対応する。とはいえ、続く [1] D1<5> 後分 *a-parinirvāṇam* は、[1] (正) <5>

³¹ 當取滅度を「常に滅度を取るべし」(国訳p. 213) とするが、*parinirvāṇam ārocayāmi* に対応することから「まさに滅度を取らんとす」との釈迦仏自身の意図を表す。cf. *Yet even now, though in reality I am not to pass into extinction, yet I proclaim that I am about to accept extinction*, Hurvitz [1976: 239] .

³² *parinirvāṇa evaṃ* の *-a e-* が処格に依る *sandhi* の用例を、中期インド語の文法書に探すのは難しい。D1 *grhe upapannaḥ aupapāduka* (KN 408, 21) のように *hiatus* 又は *-nirvāṇ'evaṃ* 母音融合の場合は多い。また男性主格の場合、ギルギット本では *-a e-* よりも *-aḥ e-* と書くのが普通である。*-a e-* が処格を表す用例としては、古典サンスクリット (Kielhorn § 22) 以外、ヴェーダ文献がある。Rg Veda 1. 95. 3ab: *trīṇi jānā pari bhūṣanty asya samudra ekam divy ekam apsu* | Seine drei Geburten umfassen sie im Geiste: die eine im Meere, eine in den Gewässern. 太字すべて処格であり、*samudra ekam* も処格である。

後分に異なる。他方 [1] (妙) <5> は、[1] <5> KNに対応する³³。次に [2] D1前分 *parinirvāyād* が、[2] KN 前分 *aparinirvāyan* 否定の語と反対の意を表すが、[2] 後分、「般涅槃」を説く釈迦仏は、[2] D1と [2] KNに共通する。そしてこの「般涅槃」を説く釈迦仏は、ギルギット写本 [1] D1<5> 後分 *aparinirvāṇam* を除く諸写本、両漢文、チベット訳すべてのテキストに共通する。

1.3. 「涅槃」に関係する韻文テキスト

「如来寿量品」D1の韻文から、*nir-√vā*、*nir-√vr̥*³⁴に関係する箇所を提示する³⁵。

【韻文】

[3] D1 偈三 v. 3abcd

nirvāṇabhūmiṃ cupadarśayāmi (正) 而爲示現立于滅度、(妙) 方便現涅槃。

vinayārtha satvāna vadāmy upāyaṃ

na cāpi nirvāmy aha tasmī kāle (正) 用權方便而現滅度、(妙) 實不滅度。

ihaiva dharmam ca prakāśayāmi

そして (ca)、涅槃の地 (*nirvāṇa-bhūmi*) を、[わたしは、] 示現させ (*upadarśayāmi*)、衆生達を (*satvāna*) 導くことのために (*vinaya-artha*)、方便 (*upāya*) を説く (*vadāmi*)。しかるに (ca) また (*api*)、その時 (*tasmī (n) kāle*)、わたしは (*aha*)、涅槃する (*nirvāmi*) のではない (na)。そして (ca)、他ならぬここで (*ihaiva*)、[わたしは、] 法を明らかにする (*prakāśayāmi*)。

[4] D1 偈七 v. 7abcd

evaṃ ca teṣāṃ hu badāmi paścād

³³ チベット写本間 (TVS, JDQ, FN, Hemis, Gondhla, Tabo等) に大きな異読はなく、KNの読みに近い。

[1] *ngas 'di ltar yongs su mya ngan las mi 'da' mod kyi yongs su mya ngan las 'da' bar smras so //*

[2] *de bzhing gshegs pa yongsu mya ngan las mi 'da' mod kyi / sems can ... gis yongs su mya ngan las 'da' bar gsungs so /*

³⁴ 「如来寿量品」散文に、*nir-√vr̥*はこの一例のみ、つまり「常住不滅」に位置的に対応する *aparinirvṛtas* である。

³⁵ 「如来寿量品」韻文に、*pari-nir-√vā*の語は使用されない。訳語には、音訳「涅槃」の訳語を使用するが、散文の文脈からして、語義は散文「般涅槃」の訳語に同じく「死」である。

ihaiṅva nāhaṃ tata³⁶ āsi **nirvṛtaḥ** (正) 吾在于斯不爲滅度、(妙) 常在此不滅。

upāyakaśālyā mameti bhikṣavaḥ

punaḥ puno bhomy ahaṃ jīvaloke

しかし (ca) 次のように (evaṃ)、[靈鷲山にいる] 彼らに (teṣāṃ)、わたしは (hu: ahu)、後に (paścāt) 話す (badāmi: vadāmi)。まさに此処において (iha^{eva})、私は (ahaṃ)、その時 (tata: tadā)、涅槃した (**nirvṛtaḥ**) のではなかった (na āsi)。[v. 5 般涅槃した (parinirvṛta) とは、] わたしの (mama) 巧みな方便 (upāyakaśālyā) であるとして (iti)、比丘らよ (bhikṣavaḥ)、再び繰り返し (punaḥ puno)、生きるもの (jīva) の世間に (loke)、わたしは (ahaṃ)、現れる (bhomi) ののである。

[5] D1 偈八 v. 8cd

yūyaṃ ca śabdaṃ na śrṇoṭha mahyaṃ

³⁷ anyatra so **nirvṛtu** lokanāthaḥ (正) 導師餘國滅度、(妙) 但謂我滅度。

しかし (ca)、[声聞の衆である] あなたたちは (yūyaṃ)、私の (mahyaṃ) 声 (śabda) を聞か (śrṇoṭha) ない (na)。かの (so) 世間の主 (loka-nāthaḥ) が、涅槃すること (nirvṛtu: nirvṛtum) を除いて (anyatra) は [聞かないのである]³⁸。

³⁶ tata < tatas? 暫定的にネパール写本の読み tada (for tadā m. c.) を採用する。ただ、両漢訳、チベット訳に時間に関する訳出はない。

³⁷ 「如来寿量品」チベット訳諸写本に、それほど大きな読みの違いはないが、この偈に対する古い写本 Gondhla や Hemis、そして F (Phugbrag) は、KN に同じく mya ngan 'das te ma rtogs par 「涅槃したことを除いて」と読む。しかし、他の TVS, JDQ, N 等の写本は、mya ngan ma 'das ma rtogs par 「涅槃しなかったことを除いて」と読む。

³⁸ 「かの世間の保護者はすでに涅槃にはいつてしまったと思わないかぎりには、お前たちは私の言葉が耳に入らない」(松濤訳 p. 115) とあるが、方便品の内容からすれば、如来が般涅槃した場合、声聞たちは經典を持することも説くこともないだろう (KN 43. 14.44. 2) といわれる。そのため筆者は、「声聞たちは、般涅槃したという [ことば、こと] だけであれば聞く」との意と解し、偈八「他 (anya) の衆生たちによって敬われた (puraskṛtas) 私は、最上の菩提 (agrabodhi) を彼らにあらわす。しかし、世間 (jīvaloka) にいる [声聞の衆である] あなたたちは、私の声を聞かない、かの世間の主が般涅槃したことを除いて [聞かない]。」として、anya のものと jīvaloka のものとを区別する。対する『正法華』は、「餘國滅度」と訳し、釈迦仏の滅度「般涅槃」ではなく、譬喩にいう父の滅度「自己は死んだ」と解釈し、散文後半譬喩の内容をこの偈八に当てる。

[6] D1 偈二十一 v. 21cd

vīparītamūḍhāṃś ca viditva bālān

anirvr̥to nirvr̥ti³⁹ darśayāmi (正) 現泥洹亦不滅度、(妙) 實在而言滅。

しかし (ca)、子供たちを (bālān) 顛倒した愚かなもの (vīparīta-mūḍha) たちであると知ってから (viditva: viditvā)、涅槃した (anirvr̥to) のではない [わたしは、] 涅槃 (nirvr̥ti) を、示現する (darśayāmi) のである。

1.4. 「非涅槃」を説く韻文の釈迦仏

韻文は、韻律に伴い、pari-の接頭辞はなく、専ら nir-√vā⁴⁰を使用する。nir-√vā [3] D1 = KN na nirvāmi 「涅槃しない」と nir-√vr̥ [4] D1 = KN na nirvr̥taḥ 「涅槃したのではない」との否定表現は、散文に唯一異なる読み [1] D1<5> 後分 aparinirvāṇam ārocayāmi 「非般涅槃」と説くとの否定表現に類似する。しかし KN は、[1] KN<5> 後分 parinirvāṇam ārocayāmi 「般涅槃」を説く散文の釈迦仏に対して、韻文の釈迦仏は、「涅槃」しないと否定する。つまり [3], [4] は「方便」により「涅槃」を説いたが、それは、「非涅槃」とすると否定するのが韻文の主張である。

韻文のテキスト問題点は、[3] から [6] の梵文と漢文に違いはないが、[3] 『正法華』「用權方便而現滅度」は、[3] D1 = KN na cāpi nirvāmi との否定文に対応しない。[3] 梵文訳「方便により滅度を示現するけれども、[そのとき] 涅槃するのではない」に対して、[3] (正) 「而爲示現立于滅度」「用權方便而現滅度」は、「滅度の示現」のみを説明し、「非涅槃」との韻文の主張は、[3] (正) に訳出されない。この [3] (正) の後分「現滅度」は、[1] D1<2> = KN<2> aparinirvr̥tas tathāgataḥ parinirvāṇam ādarśayati 「般涅槃したことはない如來は、「般涅槃」を示現する」との散文の重頌であるとも考えられる。しかし [3] (正) 「方便」を用いて「滅度」を現ずるに対して、散文 [1] <2> D1 = KN 「般涅槃」を説くことは、「方便」であるとは説かれていない。ここで、[1] <2> の

³⁹ Norman [1996: 25] nibbuta は “satisfied, happy, tranquil, at ease, at rest” を初期の意味として持つ Skt. nirvr̥ta からの派生であり、同じ語源の名詞として nibbuti (Skt. nirvr̥ti) がある。

⁴⁰ 韻文において、pari-nir-√vr̥ の用例は多数見られる。I v. 43, 84, 95; II, v. 71, 77, 78, 97; III v. 17, 30, 113; VI v. 32, 38; VII v. 5, 87; VIII v. 27; X v. 4, 6; X v. 7, 27; XI v. 2, 4, 11; XIV v. 53; XV v. 5; XIX v. 2; XX v. 5, 12.

梵文と漢訳を比較する。

2. *sadā sthita* と「常住不滅」

[1] KN = D1 <1> *sadā sthitaḥ* <2> *aparinirvṛtas tathāgataḥ parinirvāṇam ādarśayati*.

[1] (正) <1>常住 <2>不滅度。

[1] (妙) <1>常住 <2>不滅。

先に、散文 [1] <2> は、*aparinirvṛtas tathāgataḥ* と *parinirvāṇam ādarśayati* 「般涅槃したことはない如来」 「般涅槃を示現する」との重要な内容を持つ文であるが、『正法華』『妙法華』のどちらも [1] <2> 「不滅度」とのみ訳出する。この [1] <2> 「不滅度」は、[1] <2> *aparinirvṛtas* に対応すると見込まれ、直後にある *tathāgataḥ parinirvāṇam ādarśayati* 「如来は般涅槃を示現する」の文言が漢訳に訳出されていないことについては見過ごされる。本来 [1] <1> *sadā sthitaḥ* 「常住」のみであった文に、[1] <2> *aparinirvṛtas* 「不滅」が増されたとの推定も、重要な箇所だけに慎重にならざるをえない。「如来寿量品」の釈迦仏に関して、般涅槃しないで常に住すとの概念は、[1] 「<1>常住 <2>不滅」の語によって定義され、この語により釈迦仏は「無終」であると解釈されてきたことは疑いがない⁴¹。とはいえ [1] <1> *sadā sthitaḥ* 「常住」が、本来無かったと確実に言え

⁴¹ このような解釈への異論として、先に挙げた松本氏の論文を参照されたい。なお、荻谷 [2013: 165] では、「如来は常に現存している (*sadā sthita*) とは全く正反対の入滅に言及する「現行梵本」をもって本来の文であったとは到底考えられない。この「常住」(*sadā sthita*) の語句を除けば、仏の永遠・不死を示唆するような文言は「寿量品」には全く存在しないと述べる。

る資料はない⁴²。

しかし、[1] <2> aparinirvṛtas tathāgataḥ parinirvāṇam ādarśayati に対する [1] (正) <2> 「不滅度」の訳語は、意識とも取れる例文が「如来寿量品」にある。「五百塵点劫の譬喩⁴³」が説かれた後、「如来たちが、各自の仏国土で自分の名前や自分の般涅槃を説いて衆生たちを満足させる⁴⁴」との経文において、『正法華』のみ「不滅度而説泥洹」と訳出する。対応する梵文⁴⁵ parinirvāṇam vyāharati、『妙法華』「言當入涅槃」、チベット訳 yongs su mya ngan las 'das par brjod do、さらに

⁴² 『八千頌般若經』(AS)における sadā sthita の用例と、対応するチベット訳二種と漢訳四種を以下に示す。デルゲ版にある sadā sthita のチベット訳 rtag tu gnas pa は、ロンドン写本(庄司 [2016: 213])に rtag tu のみがある。全漢訳に、常住 sadā sthitāḥ に対する訳出は見当たらない。このような場合、sadā sthita の加増を疑うことも可能となる。

yathā subhūte tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhā imaṃ dharmam prajñāpāramitām upaniśritya viharanti, tathaivaite dharmāḥ sadā sthitāḥ, asthānatas tathāgatāi abhisambuddhāḥ |atas te dharmam eva[^]upaniśritya viharanti, dharmam satkurvanti gurukurvanti mānayanti pūjayanty arcayanty apacāyanti | (AS 136. 5-7) (AAA 563, 23-564. 7)

スプーティよ、如来・阿羅漢・正覚者たちは、この (imaṃ) 法を (dharmam)、般若波羅蜜 (prajñāpāramitā) に依りつつ (upa-niśritya) 享受する (viharanti) ように (yathā)、まさにそのように (tathā[^]eva) この (ete) 複数の法は (dharmāḥ) 常に住している (sadā sthitāḥ) のであり、存在しないということに基づいて (asthānatas; adv)、如来たち (tathāgata) によって、[複数の法は、] 覚られる (abhisambuddha) のである。それ故 (atas) かれら [如来] は (te)、他ならぬ (eva) 法に (dharmam)、依りつつ (upa-niśritya) 享受している (viharanti)。[如来たちは、] 法を (dharmam)、尊敬 (sat-kr) し、崇拜 (guru-kr) し、敬い (mānayanti)、崇敬し (pūjayanti)、称賛し (arcayanti)、畏敬の念を抱いている (apacāyanti) のである。Tib. L: de bzhing du chos de dag kyang rtag tu de bzhing gshegs pas mngon par rdzogs par sangs rgyaso (London 191b3-5)。

そのように、それらの法も常に如来によって現等覚されたのである。

Tib. D: bzhing du chos de dag la mi gnas pas rtag tu gnas pa yin zhing de bzhing du yang de bzhing gshegs pas mngon par rdzogs par sangs rgyas te (Derge 152a1-3) .

そのように、それらの法は住さないことによって、常に住していながら、そのようにまた如来によって現等覚されたのである。

LK『道行』450b7: 是法自致得成。ZQ『明度』492a15: 是經如來從是得無上正眞道。Kj『小品』558c14: 諸佛依止於法。Xz-I『四会』817b8: 是故如來應正等覺依法而住。

⁴³ 李 [2018]。

⁴⁴ この部分は、過去の諸仏が説く「般涅槃」を述べる。cf. KN 317, 13f.

⁴⁵ ギルギット写本もネパール写本も大きく異なりはないが、C4写本のみ異なる。tasmiṃ tasmin ātmano nāma vyāharati| aparinirvāṇa vyāharati|<<tasmiṃ tasmin ātmana: parinirvāṇam vyāharati |>> 貝葉本の下部に修正又は挿入し書かれた二重山括弧<<>>内のテキストは、他のテキストの読みに一致するが、C4本文自体は aparinirvāṇa vyāharati と書かれている。

テキスト内容からして、(正)「而説泥洹」に「不滅度」は付け足された印象を持つ。その因果性はわからないが、後に説く [1] (正)「1常住2不滅度」も同じ理由として、「不滅度」が付け足された、若しくは、[1] (正)「常住不滅度」により、上記「不滅度而説泥洹」の「不滅度」が付加された可能性も考えられる。では、なぜ『正法華』に「不滅度」と「泥洹」として訳語に区別があるのだろうか。次に、上記 [1] から [6] までの経文から、(pari) nirvāṇa の訳語の比較として、漢訳のみ提示する。

2. 1. 「泥洹」による散文と韻文の関係

散文の parinirvāṇa であれ、韻文の nirvāṇa であれ、漢訳にその区別はない。しかし、『正法華』においては、「滅度」と「泥洹」を区別するようである。

『妙法華』

散文：[1] 2「常住不滅」[1] 5「非實滅度、而便唱言當取滅度」[2]「如來雖不實滅、而言滅度」

韻文：[3]「方便現涅槃而實不滅度」[4]「常在此不滅、以方便力故現有滅不滅」[6]「實在而言滅」

『正法華』

散文：[1] 2「常住不滅度」[1] 5「於泥洹而般泥曰」[2]「其不滅度者、教令滅度開化黎庶」

韻文：[3]「用權方便、而現滅度故」[4]「吾在于斯、不爲滅度」[6]「而現泥洹亦不滅度」

『正法華』散文 [1] 5「於泥洹」と、韻文 [6]「現泥洹」の訳語は、その他の訳語「滅度」とは異なる。[6] (妙)「言滅:滅度と言う」の意識からすれば、[6] (正)「現泥洹」の訳語は、[6] D1 = KN anirvṛto nirvṛti の逐語訳に近い。韻律 triṣṭubh により、先に parinirvāṇa を nirvāṇa -- に置き換え (又は同義として置き換え)、さらに短音を必要として nirvṛti --- としたのであろう。一方 [6] (正)「亦」は、逆説よりも反語や同様の結果を表す副詞であろう。したがって [6] (正)「而現泥洹亦不滅度」の語順からすれば、[6] D1 = KN anirvṛto nirvṛti より、[1] D15 parinirvāṇa evam aparinirvāṇam に類似するともいえる。

さらに [3] (正)「現滅度」の訳語に対して、[6] (正)「現泥洹」とする区別があり、それらの語に対する考えが訳語に反映されている。つまりテキストによれば、[3] (正)「滅度」は、方便を用いて現じるとあるが、[6] (正)「泥洹」は、方便によるとは説かない。この「方便」の有無が、訳語に表れている。以下、訳語から関係する散文と韻文に、同じく「方便」による区別がある。

[6] (正)「而現泥洹亦不滅度」

[6] D1 = KN 涅槃したものではないもの (anirvṛto) として、涅槃 (nirvṛti) を示現 (ādarśayāmi) する。

[1] D1<5> 般涅槃において (parinirvāṇe)、このように (evam)、「非般涅槃」(aparinirvāṇa) と説く。

[1] (正) <5> 「於泥洹而般泥曰」

[1] KN<5> 般涅槃しようとすることなく (aparinirvāyamāṇa)、般涅槃 (parinirvāṇa) を説く。

[1] D1<5> 般涅槃において (parinirvāṇe)、このように (evam)、「非般涅槃」(aparinirvāṇa) と説く。

韻文偈二十一 [6] (正)「現泥洹」と散文 [1] (正) <5> 「於泥洹」との訳語から、散文と韻文の関係を述べるならば、『正法華』の「泥洹」との訳語の区別は、「方便」によらない「般涅槃」を説くテキストを指示する。つまり、[1] も、[6] も、そのテキスト全体において、「般涅槃」に対し「方便」により説いたというのではない。さらに『正法華』もギルギット本のように、[1] <5> 「後の泥洹に於いては、般泥曰する」との「未来における般涅槃」を肯定する。他方『妙法華』[1] <5> に処格「於滅度」の訳はないが、[1] (妙) <5> の後、「方便により涅槃を現ずる⁴⁶」とあり、「実に滅度せず」との強調から、[1] (妙) <4> 「復倍上數」とのみ訳す。この訳語からは、「未来の寿量の満了」への非積極的な主張が窺える。チベット訳においては、[1] <4> 「私の寿命の量は満たさ

⁴⁶ 如來以是方便教化衆生。この句は、『妙法華』のみにある。仮に、[1] <2> 常住不滅の後にある [1] KN<2> vaincyavaśeṇa を、[1] <5> の文の後「衆生教化」と訳としたとしても「方便」の語は、[1] <1> から [1] <5> のテキストに説かれない。

れるであろう」との「未来の寿量の満了」を説きながら、「今」や「後」等の副詞を置かず、[1] 5、「般涅槃すると告げる」との矛盾した内容を示している。

3. parinirvāṇa · nirvāṇa

パーリ語文献学者として有名なNorman氏は、parinirvāṇa (Pā: parinibbāna) も nirvāṇa (Pā: nibbāna) も、「菩提／覚り」(enlightenment) における「涅槃」であり、同じく「死」(death) における「涅槃」であるとして、parinirvāṇa と nirvāṇa に両義がある⁴⁷とする。このように論ずる理由としては、「parinirvāṇa が「死」における経験であり、nirvāṇa が「生」における経験であるという考えが広く浸透している。セイロンの仏教徒でさえも、parinirvāṇa が最終的な「涅槃」(final nirvāṇa)、又は蘊 (skandhas) が完全に散って死に至る「涅槃」との考えを持っているが、それはThe Pāli Text Society's Pāli-English Dictionary (PED) が、セイロンの仏教徒に間違った解釈をさせる原因となっている。そしてこの理由はもっと単純であり、釈迦仏の死が関係するテキストがMahāparinibbāna-suttaと呼ばれているため、この話を聞いた人は、parinibbānaは、死(だけ)のnibbānaであり、nibbānaは菩提(bodhi)のnibbānaでなければならないという帰結を想定した」と述べる。つまり、parinirvāṇaであれ、nirvāṇaであれ、「死」を表すこともあれば、「さとり」を表すこともあるとの事に、筆者も賛同する。その例として『法華経』も、parinirvāṇa と nirvāṇa の語を区別なく使用する例がある。従来「完全」と訳される接頭辞pari-を伴うparinirvāṇaは、『法華経』

⁴⁷ Norman [1996: 14-16] 古いパーリ聖典において、二種のparinibbānaは、二種のnibbānaに一致する。二種のnibbānaについて1) nibbāna obtained **at enlightenment**, which clearly is not the “blowing out” of the individual, since the individual continues to exist, 2) the other is the nibbāna gained **at death**, when the individual (we presume) is not reborn, and from that point of view could be regarded as being blown out, although such a view would lay us open to the charge of seeing Gotama Buddha as an annihilationist — a charge which he himself emphatically denied. 次に、二種のparinibbānaについて、According to the oldest Pāli texts we have about them, they are identical with the two sorts of nibbana. It is clear therefore that the difference between nibbana and parinibbāna is not that of nibbana in life and parinibbāna at death. Nevertheless, the idea that nibbāna applies to an experience in life, whereas parinibbāna applies to the experience at death, is widespread.

において、仏・如来の「般涅槃の時間と期間 (parinirvāṇakālasamye⁴⁸)」との如来の最終的「死」を意味する文脈に用いられる。そしてこの parinirvāṇakālasamaye が、「さとり」の時期として用いられる例もある。pari- を「完全なさとり」と訳すとしても、nirvāṇa「さとり」の状態に、完全な「さとり」、又は完全ではない「さとり」の区別があるのではない。ここに詳述はしないが、さらなる概念として、「無余涅槃」と「有余涅槃」が現れる⁴⁹。この語から表現される考え方は、身体という物質が強調され、もはや涅槃の状態とされる精神領域とはかけ離れ、身体の有無のみ強調されることとなる。

3. 1. parinirvāṇakālasamaye

無余・有余の概念に対する用例も含むが、基本は parinirvāṇa を扱い、同じく区別なく使用される nirvāṇa の例を提示する。如来の最終的「死」の時期に用いられる parinirvāṇa の pari- は「完全」よりも、如来の「死」を表す文脈であれば「最終」を意味する。しかし、「最終」としても、√vā のみに限定する際、「菩提」における「涅槃」（「さとり」とする）と、「死」における「涅槃」（「死」とする）のような区別は、接頭辞によるものとは言えない。前註の如く、「死」としての parinirvāṇa が「さとり」の境地を意味する用例 SP III (D1 32b7; KN 81. 3) 「一切衆生の般涅槃のために (sarvasattva-parinirvāṇahetu⁵⁰)」がある。この複合語に、「さとり」ではなく、「死」との意味は与えにくい。さらに第三章「譬喩品」には以下もある。

KN 81. 14 sarvāṃs ca tān sattvāṃs tathāgataparinirvāṇena mahāparinirvāṇena parinirvāpayati |

(D1, D2 tathāgataparinirvāṇena parinirvāpayati)

そして、それら一切衆生を、如来の般涅槃によって、大般涅槃によって、般涅槃させる。

(正) 76b04 如来悉誘以佛滅度而滅度之。

⁴⁸ この語は、SP VII, XI, XXII (KN 160. 1, 5; 186. 9; 241. 4; 410. 7) に用例がある。parinirvāṇakālasamaye が「死」の時期を表す漢訳として、SP XI 多宝如来の般涅槃は、(正) 102c20 「於時其佛臨欲滅度」(妙) 32c14 「彼佛成道已臨滅度時」と訳出する。XXII 日月淨明德如来の般涅槃は、(正) 125c21 「今時已至吾欲滅度」(妙) 53c8 「我涅槃時到、滅盡時至」と訳出する。

⁴⁹ cf. Norman [1996: 15]、藤田 [1988: 7-8]、Ebert [1985: 7 n. 30-32]。

⁵⁰ (正) 76a23: 滅度黎庶於如来法。(妙) 13b27: 度脱一切是名大乘。

(妙) 13c07 皆以如來滅度而滅度之。

さらに parinirvāṇa が「さとり」の境地を意味するとして、SP VII 大通智勝如来に対する「般涅槃」の用例から、KN 160. 1 yāvat parinirvāṇakālasamaye, KN 160. 5 mahāparinirvāṇakālasamayāt (D1: mahā 欠) の二例⁵¹がある。文脈からして、この如来が、十中劫過ぎて至る阿耨多羅三藐三菩提までの parinirvāṇa kālasamaye 「時間と期間」を表している。この parinirvāṇakālasamaye の前後 (KN 159. 9/ 160. 8) の文に、結果として anuttarāṃ samyaksambodhim abhisambuddhaḥ (= A) の句がある。対応する漢訳は、前文 A に対し、(妙) 22b25 「當得阿耨多羅三藐三菩提」(正) 89a07 「當成正覺」であり、後文 A に対し、(妙) 22c02 「大通智勝佛、過十小劫、諸佛之法乃現在前、成阿耨多羅三藐三菩提」(正) 89a13 「時世尊大通衆慧乃至十劫、逮成無上正眞之道、爲最正覺至于滅度」とある。この(正)は、前分が A に対応し、後分「滅度」は parinirvāṇakālasamaye に対応する。ではこの漢訳(正)を、如来が得た、阿耨多羅三藐三菩提 A から、如来の最終とされる parinirvāṇakālasamaye 「死」までの期間ととらえて、この如来に対して、花の雨 (puṣpa-varṣa)⁵²を降らし続けると理解する。しかし経文は「般涅槃の時期 parinirvāṇakālasamaye」の間 (yāvat)、天子が、この如来に向けて、花の雨を降り注ぐのであり、十中劫過ぎた後、その如来は菩提を得る (=A) との結果がある。ここに重要なことは、「大通智勝如来は過去の仏であるが入滅されたものとは説かれていない」(勝呂 [1993: 235]) ことである。この第七章の「般涅槃の時期 parinirvāṇakālasamaye」とは、如来が菩提を得るまでの十中劫の間を描写する。仮に、獅子座に坐し「さとり」を得るまで、さらに「死」に至るまで、衆生へ説法することなく坐し続ける如来に対して、天子が花雨を降らし続けても仕方ない。ここは、同じ時間の上に生じる「最上菩提」 abhisambuddha と「般涅槃」 parinirvāṇa の語が、「さとり」との同義に扱われていることも可能となる一例である。この箇所に対する諸写本の読み、テキスト問題や時間の問題については、稿を改めて論じたい。

⁵¹ 梵文に対応する『妙法華』とチベット訳。(妙) 22b8 「至滅度」 22c01 「至于滅度」; (Tib. P 69a4) yongs su mya ngan las 'da' ba'i dus kyi bar tu, 69a6 yongs su mya ngan las 'da' ba chen po'i dus kyi bar tu.

⁵² 神々が太鼓を打ち鳴らし続けるとの文 (KN 160. 3-5) は、ギルギット写本に欠いている。

他方で、parinirvāṇaとnirvāṇaの違いもみられる。SP VIIには、文脈からして「さとり」としてparinirvāṇaが「唯一」であり、「さとり」としてnirvāṇaが「唯一であることはない」と説明される。その経文は、他世界において、声聞たちが如来の知(tathāgatajñāna)を探し求め、彼らが聞く、如来の行為(kriyā)である。

D1 70b4⁵³ (KN 186. 7)

1) ekam eva tathāgatānāṃ **parinirvāṇaṃ** nāsty anya-dvīṭiyam ito bahir **nirvāṇaṃ** tathāgatānāṃ etat parinirvāṇaṃ · tathāgatānāṃ etad bhikṣava upāyakausālyam veditavyaṃ dharmadeśanābhinirhāraś ca

「如来たちの般涅槃(**parinirvāṇa**)は唯一つ(ekam eva)である。これ(itas)以外に(bahis)、他の第二(anya-dvīṭiyam)の涅槃(**nirvāṇa**)がある(asti)のではない(na)。如来たちにとって、これが(etad)般涅槃である。」比丘らよ、如来たちにとって、これが(etad)、方便の巧みさ(upāyakausālyam)であると知られるべき(veditavya)であり、そして、法の説示の実行(dharma-deśanā-abhinirhāra)がある。

(正) 92b17「有一滅度、無有二乘也」皆是如来善權方便説三乘耳。

(妙) 25c18「唯以佛乘而得滅度、更無餘乘」除諸如来方便説法。

2) yasmin bhikṣavaḥ samaye tathāgataḥ **parinirvāṇakālasamayam** ātamaṇaḥ samanupaśyati · *śuddham* ca pariśadaṃ paśyaty adhimuktisārāṃ śūnyāṃ dharmagatiṃ gatāṃ | dhyānavatī-mahādhyānavatīṃ · atha khalu bhikṣavas tathāgato yaṃ kāla itī viditvā sarvān bodhisatvāṃ sarvāṃ śrāvakāṃś ca saṃnipātayitvā paścād etam arthaṃ saṃśrāvayati

比丘らよ、ふさわしいときに(yasmin samaye)、如来は自己の(ātmanas)

⁵³ KNとの語の異なりはイタリックで示す。この箇所に対応するギルギット本は二本(D1, D3)あり、D1と異なる読みをD3が有する場合、その梵文を括弧に記す。D3 2b11「如来の般涅槃(tathāgata-parinirvāṇam)は、唯一つである。これ以外に他の第二の涅槃があるのではない。」(etat parinirvāṇam 欠)比丘らよ、如来たちにとって、これが、方便の巧みさであると知られるべきであり、法の説示の実行がある。(tathāgatānāṃ etad bhikṣava upāyakausālyam veditavyaṃ dha (3b1) ++++bhi+rhāraś ca)比丘らよ、ふさわしいときに、如来は般涅槃の時期を自らに(ātmanam)見定める。そして、清浄(parīśuddha)となり、信解を堅く有する、空性(śūnyatā)を法とする帰趨(dharma-gati)に踏み入り、禪定を有し(dhyānavatīṃ)、大禪定を有する、会衆(parśad)を見る。

般涅槃の時期 (parinirvāṇa-kālasamaya)⁵⁴を見定める (samanuṣāsyat)。そして、浄らか (śuddha) になった、信解を堅く (adhimukti-sāra) 有する、空である (śūnya) 法の帰趨 (dharma-gati) に踏み入った (gata)、禪定を有し (dhyānavatī) 大禪定を有する、会衆 (pariṣad) を見る (paśyati)。そこで比丘らよ、如来は「これが (ayam) [わたしの] 時 (kāla) である」と知って (viditvā)、すべての菩薩たちとすべての声聞たちを参集させてから (saṃnipātayitvā)、後に (paścāt)、この (etam) 意味 (artha) を聞かせる (saṃśrāvayati) のである。

(正) 92b18 如来正覺滅度之時、若有供養以清淨行、信樂妙言趣于經典、一心定意爲大禪思、當知爾時觀於如来、皆善合會諸菩薩衆、會諸聲聞聽受此法。

(妙) 25c20 諸比丘、若如来自知涅槃時到、衆又清淨信解堅固、了達空法深入禪定、便集諸菩薩及聲聞、衆爲說是經。

3) D1 70b7 (KN 186. 12)

na bhikṣavaḥ kiṃcid asti loke dvitīyaṃ nāma yānaṃ **parinirvāṇaṃ** vā · kaḥ punar vādas tritīyasya yānasya⁵⁵ ·

「比丘らよ、この世間において (loke)、ある (kiṃcit) 第二 (dvitīyaṃ) という名の (nāma) 乗 (yāna) あるいは (vā)、般涅槃 (parinirvāṇa) が、ある (asti) ののではない (na)。それに加え (punar-kaḥ) 第三 (tritīya) の乗 (yāna) の言説 (vāda) が [あるのではない。]」

(正) 92b22 爾乃親見世間佛道、無二滅度也。

(妙) 25c22 世間、無有二乘而得滅度。

先に、2) 般涅槃の時期 (parinirvāṇa-kālasamaya) に関しては、過去の如来の行為 (kriyā) として、「自己の死期を知って⁵⁶」会衆が清浄となったのをみてから如来は、3) の文言を説く。この2) を除き1) parinirvāṇaとnirvāṇaの区別は、**parinirvāṇa**が、**nirvāṇa**より上位としてあることである。この関係は、1)

⁵⁴ (正) 92b18 如来正覺滅度之時。(妙) 25c20 若如来自知涅槃時到。

『正法華』に、正覺と滅度が並列し説かれていることは、大通智勝如来の「さとり」までの描写に依るものであろう。

⁵⁵ KN, D3に yānasya は欠く。

⁵⁶ 荊谷 [1983: 361]。

(正)「減度」(妙)「以佛乘…得減度」が parinirvāṇa の訳語として、nirvāṇa に対する訳語を欠いていることにも表れるが、3) は異なる。3) (正)、(妙) は、同じく「減度」とあるが、⁵⁷ 兩漢訳の内容が一致するのではない。3) (正) に yāna「乗」の訳出はなく、3) (妙) は、後文に「減度」を得るには「唯一仏乗」とある。チベット訳が、parinirvāṇa に yongs su mya ngan las 'das として pari- の訳語 yongs su があり、nirvāṇa には mya ngan las 'da' の訳語を機械的に与えるのに対して、⁵⁸ 兩漢訳は、必ずしも parinirvāṇa と nirvāṇa を区別する訳語を用いるとは限らない。この訳語の無区別も、⁵⁹ 兩語の理解を難解にするのであるが、⁶⁰ 兩漢訳に目立つ語は「減度⁵⁷」である。

『法華経』の parinirvāṇa の語義に、「さとり」もあれば「死」もあるとの例を提示し、parinirvāṇa が、nirvāṇa より上位であるとの例も示した。ただし、このような解釈が漢訳者に存したかはわからないが、『正法華』は「減度」と「泥洹」とを区別する。先に、「泥洹」は、「方便」によらない「般涅槃」を指示すると述べたが、[1] 5、「於泥洹而般泥洹」の処格「於泥洹」に類似する表現は『法華経』に例がなく、『八千頌般若経』の訳経者、支婁迦讖の訳語にある。

4. 「於泥洹」の処格表現

『八千頌般若経』(AS) 第二章「シャクラ」に対応する漢訳として以下がある。

『道行般若経』

[7] LK 429c04: 阿羅漢道成已、便盡是間無處所、於泥洹⁵⁸中般泥洹。

『八千頌般若経』

⁵⁷ 「減度」は、nirvāṇa, parinirvāṇa, nirvṛta, parinirvṛta, nirvṛti の全てに対応する訳語である。『正法華』「往古品」第七章に「泥洹」は二箇所あり、偈六十前の散文に表れる。(正) 92c23「化作者、謂羅漢泥洹」は意識であり、他テキストの読みと異なる。(妙)「以方便力、而於中道爲止息故、説二涅槃」に、声聞と独覚とは訳されず「中道」として、道の途中として仄めかす。他の一例も阿羅漢の涅槃として表現される。(正) 92c29「示現泥洹」; (妙) 所得涅槃非眞實也; (D1 72a1) yuṣmākaṃ nirvāṇaṃ na etaṃ nirvāṇaṃ (cf. KN 189, 9); (Tib.) mya ngan las 'das pa de / mya ngan las 'das pa ma yin te.

⁵⁸ 「恒」この字を使用するのは、ここのみであるが、『道行般若経詞典』において「洹」と「恒」は無区別である。ここに対応する『小品般若波羅蜜経』(Kj) は、「無餘涅槃」(540b17) と訳す。

[7] AS 18: arhann ihaivānupadhiṣeṣe **nirvāṇadhātau** parinirvāsyatīti na sthātavayam|

「阿羅漢は、他ならぬここにおいて (iha^eeva)、無余 (anupadhiṣeṣe) 涅槃界 (nirvāṇadhātu) において、般涅槃するでしょう (parinirvāsyati) と思い (iti) とどまるべき (sthātavayam) ではない (na)。」

このLKに近似するとされるガンダーラ語の断簡は現存しない。ASを対比すれば、[7] LK「無處所」が、位置的にanupadhiṣeṣeに対応し、**nirvāṇadhātau**は、LK「泥洹」に対応し、parinirvāsyatiが「般泥洹」に対応する。[Kṛsh (道) : 337] から、『大明度經』(ZQ) 482c6: 應儀道成已、便盡於滅度中而滅訖は、ZQ「滅度」が[7] LK「泥洹」に対応し、anupadhiṣeṣaは「盡」に対応であろう。「涅槃」の訳語がまだ表れない、『道行般若經』も『正法華』も、「泥洹(恒)」はnirvāṇaの音訳である。そのため『正法華』[1] (正) <5>「於泥洹而般泥洹」と、『道行般若經』[7] LK「於泥洹中般泥洹⁵⁹」は、同じ原語によるとも考えられる。しかし、[1] <5>の梵文にnirvāṇadhātuはなく、D1 parinirvāṇaに対応する。では、このparinirvāṇa (e) は、本来anupadhiṣeṣe nirvāṇadhātau「界」と解釈されたのであろうか。

4. 1. anupadhiṣeṣe nirvāṇadhātau と阿羅漢の涅槃

『法華經』にanupadhiṣeṣe nirvāṇadhātau「無余涅槃界」に対する用例は、SP I⁶⁰に二例とSP XXII⁶¹に一例、合わせて三例と多くはない。梵文と漢訳の対応に統一性はないため確実なことは言えないが、SP I KN 21, 16 **anupadhiṣeṣe nirvāṇadhātau** parinirvṛtaḥ|に、(正) 66b10「無餘界當般泥洹」、(妙) 4b02「當入無餘涅槃」として、anupadhiṣeṣe nirvāṇadhātauと「無余(涅槃)界」の訳語の一致がみえる。同じ仏(日月燈明如來)に対する動詞としてSP I KN 21, 9の例、SP XXII(日月淨明德如來)の用例もあるが、anupadhiṣeṣe nirvāṇadhātauと「無

⁵⁹ AS, Tib. P. phung po'i lhag ma ma lus **par** mya ngan las 'das pa'i dbyings su, SP I, Tib. P. phung po'i lhag ma ma lus **pa'i** mya ngan las 'das pa'i dbyings su.

⁶⁰ SP I, KN 21, 9 'nupadhiṣeṣe nirvāṇadhātau **parinirvāsyatīti**|| (正) 66b08: 便自說言當般泥洹。(妙) 欠。

⁶¹ SP XXII, KN 411, 5 'nupadhiṣeṣe nirvāṇadhātau **parinirvṛto** 'bhūti|| (正) 125c26: 其佛夜半便取滅度。(妙) 53c16: 於夜後分入於涅槃。

餘(界)」が一致する用例はこのKN 21. 16のみであろう⁶²。梵文にも少ない *anupadhiśeṣe nirvāṇadhātu* は、「般涅槃」の訳語よりも、五蘊の存続⁶³などの解釈を含む身体の「死」を意味する。そのため [1] D1<5> *parinirvāṇa* に対応する [1] (正) <5> 「於泥洹而般泥洹」の「於泥洹」の原語に、*anupadhiśeṣa* と *nirvāṇadhātu* が本来存したとすれば、[1] <5> (正) の解釈として、「釈迦仏は般涅槃する」との積極的主張とすることはできよう。では次に、[7] に同じく、阿羅漢の涅槃に対して、1) *parinirvāṇa* と 2) *nirvāṇa* が、同じく「さとり」の状態である例を示し、その漢訳を比較する。

SP VIII

1) D3 10a3 (KN 210. 1)

atyayaṃ vyaṃ bhagavan deśayāmo yair asmābhir bhagavann eva satatasamitaṃ cittaṃ paribhāvitam idam asmākaṃ parinirvāṇam parinirvṛtā vyaṃ iti

世尊よ、わたし達は (*vyaṃ*) あやまち (*atyaya*) を示します (*deśayāmaḥ*)。世尊よ、わたし達によって (*asmābhis*)、このように (*evam*) いつも同じく (*satata-samita*) 修せられた (*paribhāvita*) ところ (*citta*) があり、[そのようなわたし達によって] (*yais*)、「これは (*idam*) わたし達の (*asmākaṃ*) 般涅槃 (*parinirvāṇa*) である。わたし達は (*vyaṃ*) 般涅槃した (*parinirvṛta*) ものたちである」と [考えていました] (*iti*)。

(正) 97a26: 悔過自責、鄙之徒等、每憶前者「自謂已得泥洹滅度」

(妙) 29a03: 世尊、我等常作是念「自謂已得究竟滅度」

2) D3 10b6 (KN 211. 8)

evam eva bhagavann asmākaṃ api tathāgatena pūrvam eva bodhisattvacaryāṃ caratā sarvajñatā-cittāny utpādītāny abhūvan tāni ca vyaṃ bhagavan na jānīyāmahe na budhyāmahe te vyaṃ bhagavann arhad-bhūmau nirvṛtā sma iti samjānīmahe[...]

mā yūyaṃ bhikṣava etan nirvāṇam manyadhvaṃ (KN 211. 11; *manyatha* = O)。

まさに同じく (*evam eva*)、世尊よ、他ならぬ昔に (*pūrvam eva*)、菩薩行

⁶² SP II v. 97 *parinirvṛta* に対する『妙法華』意識として、9a23「入無餘涅槃、如薪盡火滅」がある。ただ本稿では、*√vr* に対する用例は扱わない。

⁶³ *Itivuttaka* 44.

(bodhisattva-caryā) を行じる (caratā) 如来によって、わたし達 [五百人の阿羅漢] (asmākam) にも (api)、一切知者性という心が (sarvajñatā-cittāni)、生ぜしめられた (utpādita) のであった (abhūvan) けれども (ca)、世尊よ (bhagavan)、わたし達は (vayam)、それら [心] を (tāni)、知る (jānīmahe) のではなく (na)、気づく (budhyāmahe) のでもなく、そのような (te) わたし達は (vayam)、世尊よ、「阿羅漢の地 (arhad-bhūmi) に於いて涅槃した (nirvṛta) ものであった (sma)」と (iti)、想う (saṃjānīmahe) のである。[…]

比丘たちよ、あなたたちは (yūyam) これが (etam) 涅槃 (nirvāṇa) であると思う (manyadhvam) なかれ (mā)。

(正) 97b14: 昔者世尊本始造行爲菩薩時、發諸通惠、我等不解亦不覺了。

於今悉住羅漢之地而謂滅度。[…]

(妙) 29a16: 佛亦如是爲菩薩時、教化我等令發一切智心、而尋廢忘不知不覺。

既得阿羅漢道自謂滅度。[…]

(正) 97b18: 勿以此誼謂泥洹也。

(妙) 29a20: 汝等所得非究竟滅。

1) parinirvāṇa に対して、(正)「泥洹」とある、そしてこのように想う五百の阿羅漢たちに対して、それは「涅槃」ではないとの文言 2) nirvāṇa に対して、(正)「泥洹」とある。この1) parinirvāṇa も、2) nirvāṇa も、同じく阿羅漢であるものの想う「さとり」である。ここに『正法華』の「泥洹」と「滅度」の違いは、pari-の有無より、√vā の名詞と √vr̥ の過去分詞の区別のようにでもある。ただし [7] LK「於泥洹」や [7] nirvāṇadhātu は、阿羅漢の「涅槃」であり、同じく阿羅漢の「涅槃」である SP 1) も 2) も、『正法華』『妙法華』に「於」等の処格も、nirvāṇadhātu もない。続いて [7] の後文、独覚、仏の涅槃に対する経文を提示し、訳語を比較する。

4. 2. anupadhiṣeṣe nirvāṇadhātu と『道行般若經』の訳語

[8] LK 429c07: 辟支佛道成已、過阿羅漢道、不能及佛道便中道般泥洹。

AS 19: pratyekabuddho 'tikramya śrāvakabhūmim aprāpya buddhabhūmim parinirvāsyatīti na sthātavyam|

独覚は、声聞の地 (śrāvaka-būmi) を超え (atikramya)、仏の地 (buddha-būmi) を得ないで (aprāpya)、般涅槃するでしょう (parinirvāsyati) と思い (iti) と

どまるべき (sthātavyam) ではない (na)。

[9] LK 429c09: 佛道不當於中住。何以故、用不可計阿僧祇人故作功德以不可計阿僧祇人、我皆當令般泥洹正於佛中住。是故佛道不當於中住。

AS 18: buddho dakṣiṇīya iti na sthātavyam| buddho 'tikramya pṛthagjanabhūmim atikramya śrāvakabhūmim atikramya pratyekabuddhabhūmim aprameyāṇām asaṃkhyeyāṇām sattvānām arthaṃ kṛtvā aprameyāṇy asaṃkhyeyāni sattvakoṭīniyutaśatasahasrāṇi parinirvāpyāprameyān asaṃkhyeyān sattvān śrāvaka-pratyekabuddha-samyaksambuddhatvaniyatān kṛtvā buddhabhūmau sthītvā buddhakṛtyaṃ kṛtvā **anupadhīṣeṣe nirvāṇadhātau** buddhaparinirvāṇena **parinirvāsyati** ity evam apy anena na sthātavyam ||

仏は (buddho)、供養に値する (dakṣiṇa) 者であると思ひ (iti) とどまるべき (sthātavyam) ではない (na)。仏は、凡夫 (pṛthag-jana) の地 (bhūmi) を超え (atikramya)、声聞の地を超え、独覚の地を越え、無量 (aprameya) 無数 (asaṃkhyeya) の衆生たちに対して利益 (artha) を為してから (kṛtvā)、無量無数の幾百千コーティ・ニユタの衆生たちを般涅槃させ (parinirvāpya)、無量無数の衆生たちを、声聞性・独覚性・正覚者性に定住した (niyata) 者たちと為してから、[仏は、] 仏の地 (buddha-bhūmi) に住しつ (sthītvā) 仏によって為されるべき [こと] を (buddha-kṛtyaṃ) 為しつ、仏の般涅槃 (buddha-parinirvāṇa) によって、**無余涅槃界に般涅槃するでしょう (parinirvāsyati)** と、このように (evam) またこれにより思ひ (iti) とどまるべきではない。

阿羅漢の涅槃として [7] も、独覚の涅槃として [8] も、仏なるものの涅槃として [9] も parinirvāsyati の語を使用する。しかし、未来 parinirvāsyati なる状態は、それぞれに異なる。[7] 阿羅漢に対しては、LK「於泥洹中」AS「無余 (anupadhīṣeṣe) 涅槃界 (nirvāṇadhātu)」であるが、[8] 独覚に対しては、LK「中道」があり、AS「声聞地 (bhūmi) を超えるが仏の地を得ない」がある。仏なるものの涅槃として [9] は、LK「於佛中住」に、AS「仏の地 (buddhabhūmi) に住す (sthītvā)」が対応するものの、[9] AS anupadhīṣeṣe nirvāṇadhātau の訳語は、[9] LK に存在しない。つまり、[7] LK「於泥洹」は、阿羅漢の涅槃に対してのみ使用する。

支婁迦讖 (LK) や竺法護 (正) の時代に、AS *anupadhiseṣe nirvāṇadhātau* に対する訳語の定まり、もしくは原語の定まりは無かったのであろうか。『出三蔵記集』(T2145) による訳出年代として『正法華』と同じ286年に、竺法護により訳出された『光讚経』がある。最後に、この『光讚経』の訳語に対応するギルギット写本 (LPG) ⁶⁴を提示する。

4. 3. *anupadhiseṣe nirvāṇadhātau* と『光讚経』の訳語

[10] Dr 150b03⁶⁵:

次、舍利弗！菩薩摩訶薩、三千大千世界所有衆生、皆欲建立、於尸波羅蜜、三昧、智慧、解脫、見慧、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、至於無餘住泥洹果而般泥洹、當學般若波羅蜜。

(LPG 12r5) *punar aparāṃ śāradvatīputra ye pūrvasyān diśi gaṃgānadīvalukopameṣu lokadhātuṣu satvās tān sarvāṃc chīlaskandhe pratiṣṭhāpayitu kāmēnaivaṃ samādhiskandhe prajñāskandhe vimuktiskandhe vimuktijñānadarśanaskandhe pratiṣṭhāpayitukāmēna evaṃ srotaāpattiphale pratiṣṭhāpayitukāmēna sakṛdāgāminiphale anāgāminiphale arhatve pratyekabodhau yāvad **anupadhiseṣe nirvāṇadhātau** **pratiṣṭhāpayitukāmēna** bodhisatvena mahāsatvena prajñāpāramitāyāṃ śīkṣitavyam*
 再び次に、舍利弗 (*śāradvatīputra*) よ、東の方角 [にある] ガンガー (*gaṃgā*) 河 (*nadī*) の砂 (*vālukā*) の如く [ある] 世界 (*lokadhātu*) に、衆生たちが^s (*satvās*) いるところの (*ye*)、それら (*tān*) すべて (*sarvān*) のものを、戒の蘊 (*śīla-skandha*) において定着させることを (*pratiṣṭhāpayitu*) 欲する (*kāma*) ことによって、このように (*evaṃ*)、三昧 (*samādhi*) の蘊、般若 (*prajñā*) の蘊、解脫 (*vimukti*) の蘊、解脫に基づく知見 (*vimukti-jñāna-darśana*) の蘊に定着させることを欲

⁶⁴ GMNAI [2016] Vol. II, 1. *Prajñāpāramitā* Texts (1). ギルギット写本として307 foliosにより構成される *Larger Prajñāpāra* のうち、Folio 135v が『光讚経』の最後にあたる。現在、GMNAI の転写としては、Folio 27r までが、GRETEL (Göttingen Register of Electronic Texts in Indian Languages) に提供されている。

⁶⁵ Zacchetti [2005: 303] Furthermore, Śāriputra, as to all the living beings found in the Trichiliomegachiliocosm, if a Bodhisattva Mahāsattva wishes to establish all of them in the *śīlapāramitā*, in *samādhi*, in sight, in the vision and knowledge of release, in the fruit of the *srotaāpanna*, in the fruit of the *sakṛdāgāmin*, in the fruit of the *anāgāmin*, [and so on] up to being completely extinct in the fruit of the *nirvāṇa* without remainder, he should train in the *prajñāpāramitā*.

することによって、このように、須陀洹果 (srotaāpattiṭṭhala) に定着させることを欲することによって、斯陀含果 (sakṛdāgāmiphala)、阿那含果 (anāgāmiphala)、阿羅漢性 (arhatva)、独覚の菩提 (pratyeka-bodhi)、乃至 (yāvad)、無余涅槃界に確立させることを欲することによって、菩薩 (bodhisattva) 大士 (mahāsattva) は、般若波羅蜜 (prajñāpāramitā) において、習行されるべき (śikṣitavyam) である。

[11] Dr 152c16⁶⁶:

佛言、於舍利弗意云、何諸聲聞辟支佛、豈有此念。我等當速、阿耨多羅三耶三菩阿惟三佛、教化衆生、至泥洹界令滅度耶。

(LPG 19r7) bhagavān āha • tat kiṃ manyase śāradvatīputrāpi nu sarvaśrāvaka-pratyekabuddhānām evaṃ bhavaty asmābhir anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisambudhya sarvasatvā **anupadhīṣeṣe nirvāṇadhātau parinirvāpayitavyā**

世尊は言った (āha) 舍利弗よ、[あなたは、] それを (tat) どう (kiṃ) 思うか (manyase) ? いったい (api nu)、一切の声聞独覚たちにとって、このように (evam) 「わたし達は (asmābhis)、阿耨多羅三藐三菩提を正覚して (abhisambudhya)、すべての衆生たちを (sarvasatvā: -vān) 無余涅槃界に般涅槃させるべきである (parinirvāpayitavya)」 [との思いは] あるのか (bhavati) ?

[12] Dr 157a03:

佛告舍利弗、開士大士、從初發意、得無上正眞之道成。最正覺便轉法輪、爲無央數不可稱計衆生之類、開導利誼有所加益。然後至於無餘於泥洹界而般泥洹。般泥洹後、其法則住一劫、若復過劫。

(LPG 29r8⁶⁷) asti śāradvatīputra bodhisatvamahāsattvāḥ prathamacittotpādenaivānuttarāṃ samyak- saṃbodhim abhisambudhyante • abhisambudhya dharmacakram pravartyāprameyānām asaṃkhyeyānām satvānām arthaṃ kṛtvā **anupadhīṣeṣe**

⁶⁶ Zacchetti [2005: 333] The Buddha said: What do you think, Śāriputra, could the Voice-Herers and Pratyekabuddhas possibly conceive this thought: “We shall become *abhisambuddha* attaining *anuttarasamyaksambodhi*. [then] we shall teach and convert beings bringing them to the **nirvāṇa-realm, and cause them to attain extinction**”?

⁶⁷ このテキストは、筆者による転写である。この箇所の前部分において、LPGと『光讚』の読みは合わない。

nirvāṇadhātau parinirvānti • teṣāṃ parinirvṛtāṇaṃ kalpaṃ vā kalpāvaśeṣaṃ vā saddharmaṣ tiṣṭhati •)

舎利弗よ、菩薩大士たちは、他ならぬ (eva) 初発心 (prathama-citta-utpāda) によって、阿耨多羅三藐三菩提を正覚する (abhisambudhyante)。正覚し、法輪 (dharmacakra) を転じて (pravartya)、無量無数の衆生たちの利益 (arhta) を為してから (kṛtvā)、無余涅槃界に般涅槃する。それらの般涅槃した (parinirvṛta) ものたちにとって、一劫 (kalpa) または (vā) 一劫余 (kalpa-avaśeṣa) の間、正法 (sad-dharma) は住する (tiṣṭhati) のである。

以下、梵文 **anupadhiśeṣe nirvāṇadhātau** に対応する『光讚』の訳である。

[10] 於無餘住泥洹界、而般泥洹

[11] 泥洹界、令滅度耶

[12] 於無餘於泥洹界、而般泥洹

『光讚』[10] と [12] に「於無餘」の訳出がある。[11] のみ「無餘」の語を欠き、さらに *pari-nir-√vā* に対して「滅度」との訳語の区別は、対象が衆生だからであろうか。[10] 「般泥洹」は、[10] LPG *pratiṣṭha* に対応し、主語が同じく、開士⁶⁸大士・菩薩である [12] *parinirvānti* の文に訳語は一致する。文脈からして、[10] [11] 「泥洹」は「さとり」の状態として、[12] 「於泥洹界」は、般涅槃と正法の関係から「死」を表すとも考えられるが、「無余」との訳語からは、「最終」を意味する。ここに『光讚』[10] [11] [12] の訳語と *anupadhiśeṣe nirvāṇadhātau* が対応することは、逆からすれば、*anupadhiśeṣe nirvāṇadhātau* がある場合、「無餘」や「界」との語が、その原語を表す。仮に、処格を用いる LPG [12] 然後至於無餘於泥洹界而般泥洹が、SP [1] (正) 5 「然後乃於泥洹而般泥洹」に、類似すると指摘されるなら、[1] (正) 5 に「無餘」や「界」の訳語がないことは、竺法護の原語に、*anupadhiśeṣe nirvāṇadhātau* はなかったとみることもできるのである。

5. ギルギット本 *parinirvāṇa* と『正法華』「於泥洹」

以上、『法華經』ギルギット本の処格と『正法華』の処格の対応から、『道行

⁶⁸ Krsh (正) 開士 (kāi shì) “a man, who is on the way to enlightenment.”

般若經』の類似する処格の表現、さらに *Lager Prajñāpāramitā* (LPG) ギルギット本と竺法護訳の処格の対応を提示した。以下に SP を基本として要約する。

- 1) *pari-nir-√vā* の動詞は、阿羅漢・独覚・仏・凡夫など、すべてに対して使用する。
- 2) *parinirvāṇa* は、*nirvāṇa* より上位に置かれる場合はあるが、仏と阿羅漢の涅槃を語によって区別しない。(√*vā* は状態を表し、√*vī* はその状態を得たとして『正法華』は「泥洹」と「滅度」を区別するが、その区別は、*pari* の有無によるものではない。)
- 3) 『正法華』は「如来寿量品」において、「方便」の語により、「滅度」と「泥洹」を区別する。
- 4) 「無餘」や「界」の訳語からは、*anupadhiṣeṣe nirvāṇadhātau* の語が予想される。

むすびにかえて

ネパール写本と中央アジア写本とは、異なる読みを持つギルギット本 [1] D1<5> *parinirvāṇa evam aparinirvāṇam ārocayāmi* に、唯一対応する [1] (正) <5> 「於泥洹而般泥洹」を中心として、『法華経』の *parinirvāṇa* を考察した。同じくギルギット写本と竺法護の訳出例として『光讚経』の用例から、*anupadhiṣeṣe nirvāṇadhātau* に対する訳語には、「(於) 無餘」や「界」が訳出されることから、[1] (正) <5> 「於泥洹」の原語として、*anupadhiṣeṣe nirvāṇadhātau* が必ずしも対応するのではないことを示した。これらの考察をまとめれば、「常住不滅」との経文の後、釈迦仏の未来における般涅槃の状態として、[1] D1<5> *parinirvāṇa* と [1] (正) <5> 「於泥洹」の語は対応を示す。この両語の対応は、ギルギット本も『正法華』も、寿命の満了への肯定として、釈迦仏の般涅槃を捉えていることを理由とする。そして、散文 [1] D1<5> *parinirvāṇa*、[1] (正) <5> 「於泥洹」に表現された「釈迦仏は般涅槃する」との考えは、散文 [1] <5> のみに止まっている。なぜなら、韻文に、未来の寿命の量は説かれなからである⁶⁹。

⁶⁹ 松本 [2019: 343] 偈と散文部分の思想的相違として、偈の部分には、如来藏思想的傾向が明確に認められ、散文部分にある仏陀の将来の最終的入滅という理解は、生じようもないと述べる。

以上を検討した上で、現時点での筆者の理解は、[1] D1 parinirvāṇa 「般涅槃において」とは、散文 [1] 全体の捉え方として、[1] D1.2 parinirvāṇam ādarśayati 「般涅槃を示現する」や、[1] D1.2 aparinirvṛtas 「般涅槃したことはない」の語よりも、[1] D1.4 bhaviṣyayusṣpramāṇasya paripūrṇatā 「寿命の量の満了」 (= [1] (正) <3> 「寿命限也」) との句への同意が、ギルギット写字生の理解を示すものとして主要であった。しかし、続く韻文に、[3] na cāpi nirvāmy, (正) 而現滅度、(妙) 實不滅度や、[4] na…nirvṛtaḥ, (正) 不為滅度、(妙) 不滅として「非涅槃」との否定が説かれることから、[1] D1.5 parinirvāṇa と [1] (正) <5> 「於泥洹」が、一致するにもかかわらず、[1] D1.5 後半に「非般涅槃」との否定辞を付加した。

[1] D1.5 parinirvāṇa evam⁷⁰ aparinirvāṇam ārocayāmi

[1] (正) <5> 然後乃於泥洹而般泥洹曰

結果として、D1 後半 (太字) は、『正法華』の読みとも、他写本の読みとも、異なる独自の経文が、意図的に修正されたと考えられるのである。

【略号・参考文献】

(正) : 『正法華經』(竺法護譯) 大正第9卷263番

(妙) : 『妙法蓮華經』(鳩摩羅什譯) 大正第9卷262番

BHSG (D): F. Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary* New Haven, 1953.

BLSF : The British Library Sanskrit Fragments.

BPPB : Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica

D : LSMS 12: (D1,D2,D3) 『インド国立公文書館所蔵ギルギット法華經写本写真版』2012.

GMNAI : Gilgit Manuscripts in the National Archives of India, Facsimile Edition.

⁷⁰ 私的な勉強会において、この否定辞/a/は、写本に evama と書き ma への Virāma 符号 (ṃ) の書き忘れの可能性も指摘された。仮に、書き忘れであれば、D1 写本と『正法華』の対応は確実となり、散文に、「釈迦仏は未来に般涅槃する」との積極的主張をみいだすことになるだろう。

- Hurvitz : Hurvitz, Leon. *Scripture of the Lotus Blossom of the Fine Dharma*. New York, 1976.
- IOL San : India Office Library. BLSF Tokyo, 2006.
- KN : H. Kern and Bunyiu Nanjio eds. *SP*, Bibliotheca Buddhica X, 1908-1912.
- Kern : J. H. Kern, *SP or The Lotus of the True Law*. Oxford: Clarendon, 1884.
- Krsh (正) : S. Karashima. 『正法華經詞典』 Tokyo, 1998.
- Krsh (道) : S. Karashima. 『道行般若經詞典』 Tokyo, 2010.
- LSMS : Lotus Sutra Manuscripts Series.
- O : LSMS13: 『ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵 (SI P/5他) 写真版』 2013.
- PW : Otto Böhtlingk, Rudolph Roth, *Sanskrit-Wörterbuch*, 7 Bde., St. Petersburg, 1855-1875.
- RgsGr : A. Yuyama. *A Grammar of the Prajñā-pāramitā-ratna-guṇa-samcaya-gāthā* Canberra, 1973.
- SP : *Saddharmapuṇḍarīkasūtram*.
- SP Index : Index to the *SP* -Sanskrit, Tibetan, Chinese- Tokyo, 1985-1993.
- SP (K) : O. v. Hinüber ed. *A New Fragmentary Gilgit Manuscript of the SP Romanized Text*. Tokyo, 1982.
- SP (W) : S. Watanabe ed. *SP Manuscripts Found at Gilgit Romanized Text v. 2* Tokyo, 1975.
- T : 大正新脩大藏經 The SAT Daizōkyō Text Database.
- 『光讚』 : 『光讚經』 (竺法護譯) 大正第8卷222番
- 『四会』 : 『大般若波羅蜜多經』 (玄奘譯) 大正第7卷220番
- 『小品』 : 『小品般若波羅蜜經』 (鳩摩羅什譯) 大正第8卷227番
- 『道行』 : 『道行般若經』 (支婁迦讖譯) 大正第8卷224番
- 『明度』 : 『大明度經』 (支謙譯) 大正第8卷225番
- 松濤 : 松濤誠廉・丹治昭義・桂紹隆訳 『大乘仏典5法華経II』 中央公論新社 2001-2002 (初版1976)

Ebert, Jorinde

[1985] *Parinirvāṇa untersuchungen zur ikonographischen Entwicklung von den indischen Anfängen bis nach China*, Franz Steiner Verlag Wiesbaden GmbH, Stuttgart.

Norman, K. R.

[1996] "Mistaken ideas about *Nibbāna*" *Collected Papers* VI, Oxford.

Zacchetti, Stefano

[2005] *In Praise of the Light* A Critical Synoptic Edition with an Annotated Translation of Chapters 1-3 of Dharmarakṣa's *Guang zan jing*, Being the Earliest Chinese Translation of the Larger Prajñāpāramitā, Tokyo, BPPB8.

荻谷定彦

[1983] 『法華経一仏乗の思想：インド初期大乘仏教研究』 東方出版

[2013] 「はじめて仏入滅を意義づけた『法華経』『如来寿量品』」『伊藤瑞穂博士古稀記念論集』

山喜房佛書林

久保継成

[1991] 「.....buddho.....agra-sattvaḥ」『印度学仏教学研究』39巻2、903-899頁

勝呂信静

[1993] 『法華経の成立と思想』大東出版社（再版1996）

庄司史生

[2016] 『ロンドン写本カンギユル所収チベット語訳『八千頌般若』の研究』山喜房佛書林

藤田宏達

[1988] 「原始仏教における涅槃-nibbānaとparinibbāna-」『印度学仏教学研究』37巻1、1-12頁

松本史朗

[1989] 『縁起と空—如来蔵思想批判』春秋社

[2007] 『『法華経』の文学性と時間性』『在家仏教こころの研究所紀要』2号

[2010] 『法華経思想論』大蔵出版

[2012] 「久遠実成の仏について」『インド論理学研究第V号』山喜房佛書林

[2017] “Considerations on the So-called Eternal Buddha”『在家仏教こころの研究所紀要』8号

[2018] 「『久遠実成の仏』の寿量について」『インド論理学研究第XI号』山喜房佛書林

[2019] 「parinirvāṇam ādarśayatiについて」『駒澤大學佛教学部論集』50号

李暎実

[2018] 「五百塵点劫の譬喩」に関する一つの覚書」『インド論理学研究』11号49-58頁

[2019] 「如来寿量品」KN, 319. 2-4の解釈をめぐって」『印度学仏教学研究』68巻1号423-420頁

〈キーワード〉 parinrvāṇa、「般涅槃」、「泥洹」、ギルギット写本、「如来寿量品」